‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

76号 1993.12.30
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: THE DOGS D'AMOUR 1993 11.3 渋谷ON AIR

何もしかけのないシンプルなステージにメンバーの4人が出てきて、ドラムの音で演奏がはじまった。単純ともいえるロックンロールのビートにのって、パワフルで美しいヴォーカルがきこえてきた。そのとたんに、あ、全然ちがう。同じようなロックンロールでも前座でやったEASY WALKERSとは全然ちがうってわかった。DOGS D'AMOURのロックンロールにはじから魅えるものがある。2曲目にやった"EVERYBODY LOVED JOHNNY SILVER'S EVERYBODY MISSED HIM WHEN HE DIED"という歌詞をきいていて、「あー、この人は悲しみを知っている」って思った。この歌を歌い終えて、ヴォーカルの人はネクタイのように結んでいた黒いスカーフを首からほどいて、マイクスタンドにかけた。あ、そういうことなのか。白いシャツに黒のスーツ、黒のスカーフという服装の意味が私の心の中にとびこんできた。誰かを(私にはジョニー・サンダースってきこえたところもあったのだけど…)悼んでいるのだということがすぐにわかった。

何曲か歌っていくうちに黒の上着とベストを脱いでいった。カールした長い髪がシキにぬれ、それをときどきかきあげながら歌うその様子、そのしわがれた歌声、そしてところどころききとれるその歌詞、それらのすべてがなんと美しかったことだろう。ときどき映画"THE LAST WALTZ"の中で"DRY YOUR EYES"を歌っているニール・ダイアモンドを思わせた。ヴォーカルの人はギターもひくのだけど、その音色も美しかった。とてもやさしい人なんだと感じた。他のメンバーももちろんすばらしく、とくに力強いドラムはきくものの心をぐいぐいとひっぱって前進させる。ギターの音もベースの音もはげしいし、ドラムも強い。それなのに4人のつくり出す音楽をきいていると、4人がとても薄くて割れやすいガラスの球のような生命(いのち)をそうっと大事に手に持っているように思えてくる。

アンコールの最後に弾き語りのようなところがあって、"IF THE ROCK 'N' ROLL BREAKS THE BARRIER, WE'RE THE SAME"(私にはこうきこえたのだが…)というのをきいていて、私も心からそうだと思ったし、そういうロックンロールのなかで心から癒うことができたことを幸福(しあわせ)だと思った。

ライブが終ってメンバーがステージから去った。マイクスタンドにかかったままの黒いスカーフが微かにゆれていた。

ライブがとてもよかったので、CD"MORE UNCHARTERED HEIGHTS OF DISGRACE"を買って聴いた。ライブで感じたのとはちがう重厚さと力強さがすばらしい。そして、歌にはやはり悲哀が感じられる。深く人生が歌いこめられている聴きごたえのある歌ばかり。"SCARED OF DYING"(「死ぬのが怖いなら」)というような歌をロックンロールのビートで聴くというのは、音楽による濃厚な人生体験である。

Tyla … Vo.& Gr, Steve James … B
Bam … D Darrell Bath … G

CD"MORE UNCHARTERED HEIGHTS OF DISGRACE"のジャケット。イラストレーションはVo.& GのTyla.

Scared Of Dying

If you're scared of dying just close your eyes.
Off those demons will disappear
give them time
You're surrounded by angels, all toasting
to your health
What is money without friends nearly
sadness in wealth.

And all the anger and mixed emotions
got said
It seemed like all the trust had gone
what once stood out stronger
than life itself had nearly faded and gone.

You might say that I'm the one
to blame for your pain
You might say a lot of things I do are wrong
You might say that I don't care
and it'll never be the same
But that's the way I am be it right or wrong

So they called you a demi god,
a minstrel and a clown
they criticised and moralised
and kicked you when you were down.
And all those wanderin' minds
that you left behind,
they gazed into confusion
betrayed by one of their kind

WORDS: ジョナサン

なぜ歌んでくれたのか。なぜ真実を言葉には出来ないものが感じられるのか。悪いのは苦しみだから。なぜ怒りには出来ない以上にものが見えるのか。狂気は苦しみだから。なぜ苦しみはすべてを知るのか。苦しみは「精神」だから。(「悪魔の黙示」より)

LIVE: 電光石火 1993.10.19 新宿ロフト

電光石火は、歌詞もわかりやすくストレートだし、演奏もききやすくシンプル。細工をしたり、ひねったりしたところが全くない。強引はいい方をしてしまえば、歌詞もメロディーも演歌に通じるところがあるともいえる。ところが演歌と決定的にちがうのは、情緒や感傷のおしつけがましさが全くないところだ。歌っている人間の視線が、たしかに自分の内部にむけられているからだ。

演歌の別れの歌をきいても、その歌われている陳腐な情景くらいしかうかんでこないけれど、電光石火の別れの歌には、その歌われている情景——たとえば恋人との別れとか——とともに、いろいろな意味での別れというもののもつ普遍性や共通性が感じられる。「さよなら」という言葉は同じでも、その言葉にのせる想いのたけの質も量も演歌とはまるでちがう。親しみやすいけれど深さがあるということだ。

それに電光石火の曲は、それぞれの表情をもっているから、きくものも曲によってちがう心持ちになれる。演奏にあわせて踊りたくなるものもあるし、しみじみと歌に耳をかたむけるものもあるし、心につきささって身動きできなくなるものもある。30分か40分のステージなのに、深くいろいろな人生を生きることができるから、ゆたかな時間を過すことができるから、その30分か40分がとても長く感じられる。

この日は全部で4バンドで、BLESS, HAWKINS, SHIT BABIES, 電光石火という順番。前の3バンドはみんな客となれあったふやけた演奏で最低。段のところにすわって、ときどきステージを見るだけで他のことを考えていた。何も体験できない、何も生まない2時間を過したあとで電光石火のすてきなライブにふれていられて本当にうれしかった。

いいバンドのステージには必ず「潔さ」がある。ライブの出来がよくてもよくなくても決して客となれあったりせずに演奏することに徹する。客を「つき離す」ところがある。そのほうがきくものをひきつける。

LIVE: マンガンズ 1993 10.1 高円寺屋根裏II, 10.16 高円寺LAZY WAYS, 11.3 高円寺屋根裏II, 11.19 福生UZU, 12.5 高円寺2000年, 12.21 下北沢タウンホール

優れた聴き手であり読み手である滝川さん(「原宿サンダー通り ホコ天ローラーサウンドムーブメント」の編者)は、マンガンズの10月1日屋根裏IIのライブについてこう書いている。

「マンガンズを聴かせていただきまして思ったことですが、それは文化的なことがらにかぎりませんで、いろいろなことに共通します一つの類型的なとらえ方とも考えるのですが、破から調へ、そして調が整うと次の破へと時間は進んでいく、マンガンズは一つの調の時節のように思いました。ロック道の探究の深み、求道の精神の高さ、それらに基きますその次の破を期待いたします」

滝川さんの言葉を借りていえば、10月1日までのマンガンズは確かに「調の時節」にいた。しかし、そのあと10月16日LAZY WAYSから12月21日タウンホールまでのライブは全て「調」ではなかった。

いまのマンガンズは「歌を聴かせる」気はないとしか思えない。ヴォーカルの橋本さんは床を転げ回ったり、スピーカーによじのぼったり、ギターまでふりまわしたりして、歌を聴かせるのではなく、ステージを意味なく動き回っているだけ。かんじんかなめの歌が歌になっていないから、それを生かしようがなく演奏もバラバラ。「歌を聴かせたいのだけど、それがうまくいかない」というほうがまだましだ。それなら「乱調」ということで、「調」になるかもしれないという期待がもてる。

もしかしたらいまは「破の時節」で、さらなる「調」へと向かっているのかもしれない。それはいずれわかるときがくる。それはともかく、いまの「歌を聴かせる」気のないマンガンズは聴く気にならない。

ESSAY: 瀬沼孝彰「路上からの手紙へ」の冒頭部分

音楽や書くことは本来ひっそりとした心の時所から生まれてくるものなのではないだろうか。

耳もとに氾濫するあまりにも前向きな愛や自由を求める歌を聞いていると厚塞のようなものが背すじに走っていく。

愛は勝つや、いつまでもおまえを守る式の歌に身をまかせた瞬間、愛が勝つのは本当に難しい現実の生活や、他者を守るどころか自分の足もとにおぼつかない不安定で脆弱な心の姿が見えなくなってしまうのではないだろうか。

くよくよするのはやめてもっと自由な地に向かって旅立つんだと気持よく主張されても、そんな場所が何処にも見えないことは歌っている本人にもよく分っているように思えてきてしまう。力強い声で讃美されれば、讃美されるほど自由や希望は曖昧で空疎なものに感じられてきてしまう。

リズムもメロディーも声の質も均一化された多くの歌たちの背後にはあまりにも奇怪で愛が成り立ちにくいザラついた現実の砂漠がひろがっているのかもしれない。不自由で息苦しい現実の砂漠がフィクションとしての歌を必要とし、流通させるのだとも考えられる。でも必ずCDには終わりがあり、音楽の外に出ていかなければならなくなる。

「路上からの手紙」は、スリート・ビジョンのファンのくたちの文、写真、ライブ感想、対談などをまとめた本「同じ道を歩いていた一人の若人の手紙」(恋怪子発行)に掲載